「内田祥三談話速記録」（八）

聞き手・村松貞次郎

ここに紹介するのは、昭和四十三年二月十七日から十一月一日にかけて、全十六回にわたって行われた内田祥三の談話の書き起こしである。内田祥三は、大正から昭和にかけて東京帝国大学教授を務め、建築・都市行政において大きな影響力を持った人である。また建築家としても多くの作品を残し、東京大学内では関東大震災以後のキャンパス復興の責任者であった。後に第十四代総長を務め、戦時下の困難な時期に大学行政の任にあたった。

『内田祥三先生作品集』（非売品、昭和四十四年十一月三十日発行、内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編集、鹿島研究所出版会発行）の「あとがき」によれば、出版部会は、「四十三年の一月から数十回先生のご自宅にて委員が長時間に亘り」打ち合せをした、という。従って、談話はその打ち合せの一部ということになる。実際、作品集を読むと、談話と同じ文章、内容が少なからず含まれていて、談話が作品集を編纂するために企画されたことが判る。聞き手は故村松貞次郎東京大学名誉教授（当時、生産技術研究所助教授）である。

底本は、大学史史料室所蔵の「内田祥三先生談話」と題されたファイルを用いた。鉛筆書きのものをゼロックスコピーして綴じたものである。

今回は座談の第十五回（昭和四十三年七月六日）、第十六回（同十一月一日）を収録する。

凡例

1．原文は、談話の録音テープから書き起こされたものであり、誤字・脱字などが散見されるので、最小限の訂正を加えた。句読点も最小限の訂正を加えた。

2．人名は、判明する限りにおいて氏名を調べ、（　）で補ったが、不明のものは仮名のままにしておいた。建築名も、原名称、建設年を（　）で補った。また書き起こしのなかの？マークも、不明なものはそのままのこし、（？）マークで示した。

○第十五回（内田祥三先生訪問、七月六日、午後二時。）

内田　ここに名前が書いてありますから、もし入れるんだったら名前を入れなきゃ興味がないし・・・。

村松　きょうは最初に写真の説明をお伺いしてテープに入れておきましょう。そうすればあとで写真を編集する時に、杉村陽太郎・・・。

内田　これは一高の一年に入学した当時の、明治三十七年ですね。杉村陽太郎の入っているやつ、ここの下に名前が書いてありますから、この写真はぼくとしては非常に記念的なものなんだけど、しかしこんなのはつまらないからやめたほうが、ただお目に掛けるだけですが。これは秦逸三、これが菱田唯蔵、これを菱田君の兄貴が見て、何か非常に具合がよく撮れている、配置が具合がいいというんですよ。それで特に焼増ししてくれといってもらわれて、この菱田は何でもないんだけど、その兄貴が（?）これは大学を卒業した時の直後で明治四十年、卒業したものだけ六人です。これは（?）にはおもしろい写真だけど、海上ビルディングの構造方面の関係者で、デザインをした方面の人は入っていないですね。デザインの責任者は曽禰（達蔵）先生で、曽禰先生が入っているぐらいで、ぼくらは（?）ようで、古橋君などがやっぱり計算に関係してたんだな。

村松　古橋さんというのは古橋四郎さん・・・。

――名簿を見ればわかります。

村松　先生の後輩ですね。

内田　ええ、ここでぼくより先輩の人は曽禰先生だけです。このT村というのは若いんだけど、ぼくは（?）や何かの作り方を教えただけで、一人仕切ってやったんです。大学出ないで工手学校だけで。それで郵船ビルをやる時はこれが一人で勘定したのです。それからこれが都市計画の関係で都市研究会の会合。これが・・・。

――後藤新平さん・・・。

内田　大正八年十二月二十日、これは非常に変った人がいますよ、桐島像一という三菱の。あの人はこの時分市会議長だったかな。それからこの写真は初代の六大都市の建築課長と、それから六大都市の都市計画委員会の建築の主任技師、それが希代に全部集まって、その世話をやって下さった方の中でお呼びしたのは曽禰先生、中村（達太郎）先生、佐野（利器）先生なんだが、これも非常に喜んできて下すって、大正九年の十一月一日に実施されたんで、これはその時の第一回だか、二回だかの建築監督官会議ですね。

村松　新橋東洋軒ですか。

内田　じょう君は第一回の大阪地方委員会の建築の都市計画のほうの技師を兼任して、ぼくより先輩が一人います。池田実という人です。

――先輩でしたかね。

内田　ええ、三十八年です。

――中沢（誠一郎）さんもおいでですね。

内田　中沢君はぼくより後輩です。

――森田慶一さんもおいでですね。

内田　森田君も、こんなことはいまはもう知っている人はいないけど、初めは都市計画に入って、しばらくやって、中沢君、柳沢（彰）

君、森田君、小出君、これが初めは名古屋の都市計画委員会にいたんだが・・・。
村松　津田（敏雄）さんですね。竹内六蔵さん、警視庁のね。
内田　この池田（貢）君が建築線の規定、つまり一尺五寸下がらなければ家を建ててはいけないということを大阪で出向していた。だから誰が決めたんだということを、ぼくはずい分根強く聞くんだけど、結局池田君にはわからなかった。あれがもし山口さんの報告の中にそういうことでもあれば、はっきりするんですけど。
村松　これは何ですか。工事写真ですね。
内田　これは歴史的にはおもしろいんだけど、今度のには。辰野先生の設計された工学部の一号館、元の本館が地震でまいってしまいまして、それを壊しに掛かっている。これはまだ足場を掛けているだけで、こういう建物なんですよ。アーケードがあって、そして上にこういう大きな（?）、これがエレベーションです。壊れないうちの。これは中庭のエレベーションです。
――中庭ですね。われわれ記憶があります。
内田　ここいらのところに大きないちょうが一本植わっていた。もうこれはなかなかないですね。
村松　これは先生紙がはさんでおられるところ・・・。
内田　こういうのは、これがもし具合が悪ければ、こういうような位置のがあったらいいと思うんですが。これは法経学部の一号館のアーケードをとおして、そして北側をずっと見たところです。こっち側にこれと同じようなアーケードがありまして、それを撮ってみたんで、これは丁度葉が落ちた時で、両端が少し見えるようになっている。写真が悪いものだから。それから、これはいまのアーケードの・・・。
村松　文学部のほうですかこっちは。
内田　そうかも知れません。
村松　法経のほうのアーケードですね。これが結局安田講堂の（?）ですね。
内田　これが・・・。
村松　図書館ですか、工学部の一号館ですね。列品館のほうですか。
内田　昭和十四年四月、これの写真はぼくはぜひ欲しいと、この四ツ角からこっちを見たのと、門のほうは見ないでいい、こっちの左右を見たやつを欲しいと思ってます。
――みんな同じ日付ですね。
内田　これがいまのと反対の図書館のほうです。
――先生がお写しになったんですか。
内田　ぼくが写したのかも、いやそうじゃないな鳥畑（幸治）君かも知れないな。
村松　鳥畑さんのおじいさんですね。
内田　きのうの夕刊かな、赤旗の立っている写真が出てました、大講堂に。これは南京攻略の祝賀の・・・。
――野外でやっておられたんですね。
村松　大学でやって（?）。

内田　いや大学がやったんです。だから立っているのはみんな大学の先生で、これは・・・。
村松　長与（又郎）総長ですね。
内田　ずい分集まってますね、運動場です。これがこの前お話した柴田畦作さんの（?）。
村松　世界教育会議・・・。
内田　それを大講堂でやったんです。これがいまの現状ですね。このいちょうが付いたのがはっきりして・・・。
――なるほど小さいですね。
内田　昭和十二年に、この時丁度雨のまま葉が凍って非常にきれいになった、そこを写したんです。これがこのどっちかの通りですね。上海の自然科学研究所の写真があったんですよ。これはあとでお目に掛けますが。図面もぼくのところにできて、やっぱりこれも日立や伝研と同じように、いくつにか分けておいたんですけど、結局これはどっちかというと国策というほうだな。何か日本が作るんだから大きなものを作ってみせなくちゃいけないというわけで、それでみんな一緒にしたんです。ただこれには理学部の天文だの、いろいろ天体観測に関するものが入っているんです。それをここに入れちゃうわけにゆかないものだから、それだけがこういうふうにボツボツ出したんです。
村松　磁気室とか、霜室とかありますね、外へ出してあるんですね。
内田　それで部屋の中へ入れていいものはみんな入れて、これはやっぱり配置がないとどっちの面がどうなっているのかということがわからないものだから、配置とこの敷地が、これは完全にじゃないけれども、少し辛抱すればゴルフができるような敷地を、一画地でもってできるのです。
村松　ずい分広いのですね。
内田　家がよく似てましょ、大学のような家が建っている。
――この写真ですか、先生のご本に載ってましたですね。
内田　載っていたかも知れません。研究所、本館、東南部、それからこれが西北部、エレベーションはこれとこれと二つ。あるいはプランとかエレベーションとか（?）。これは割合いはっきりしている写真です。
村松　いい写真ですね。
内田　これは向こうで写したんだから、こっちの誰かが写したのか、あるいは向こうの支那人が写したか。こういうのは支那人が写したとすると、それを載せるのはやっかいでしょうね。
村松　いやもう構わないでしょう。
内田　もう年限が経っているから・・・。
――なかなか（?）まで撮っていますね。
村松　こういうのは素人の写真みたいですね。これは内部ですか、講堂ですね。
内田　この家を建てる時の日本の外務大臣の方針が、元々支那の金、日本が何かで損害賠償の償金を取ったんです。それが相当の額で、初めは利息を積んでいたんだけれども、利息だけでも相当なも

のになるんです。ですからその利息を何年か集めたところで相当な建築物を建てようというんで、北京に人文科学研究所、上海に自然科学研究所を建てた。そして北京の人文科学研究所のほうは設計、施工のすべてを伊東忠太先生に、それから上海の自然科学研究所のほうはぼくにやってくれということで。ところが支那事変がだんだんと拡大してきまして。人文科学研究所のほうには支那から見て世界的に偉い学者がいるんです。そういうのがだんだんと蔣介石に見切りを付けて社会主義のほうに移って行った。それから移っていないでいるようなものは、捕まったのもあるかも知れないですが、それでだんだんと減ってきて、そして事実人数が揃わなくなって、やれなくなってきたんですね。だから、これはあとのことにしようと、しかし上海のほうはともかくできるんだし、それからその、向こうの研究員というのが大体支那の人を収容して、それに自然科学を教える。やっぱり人文科学は非常に進歩していたが、自然科学のほうは進歩していなかったんですね。そういうことが主だから、少しでも早く作って使ったほうがいいというので始めたんです。そんなふうな関係があって、能力はすべて支那人に提供してもらうけど、材料その他日本にあるものは全部日本から持ってゆくと、そういうことでみんな日本から持って行ったんです。この家具なども一つ、一つ日本で製作して、それを持って行って据付けたんですよ。そういう日本でもこういうものができるんだというのを作って見せた。まあ値段などは、そういう関係でずい分安く叩いたんだろうと思いますけど・・・。

村松　その研究所の所長さんなんていうのは、どういうことになっていたんですか。

内田　所長さんは初めは人がいないものだから日本人ですね。それで一番最初の第一回の所長というのは横手千代之助さんだと思います。ここにあります、書いてないからわかりませんが。

村松　あとは研究員の大部分が中国の人ですか。

内田　そうです。日本人も先生になるために向こうにやっぱり何人か行って、横手さんは二代目かな、一代目は理学部の物理の先生だったか、ちょっと今はわかりにくくなっちゃったですかね。

村松　あるいは東京大学（?）関係の書類を（?）。

内田　（?）東大と同じで、何かどんなふうなものを作りたいか希望はないかと聞いたら、東大にきて勉強さす人を向こうで勉強さすんだから、東大にきて勉強していると同じような気分にしたいから、同じ気分のものにしてくれという非常に強い要求がありまして、それでこういうふうなものができたんです。

村松　（?）事件か何かの賠償金ですね。

――（?）

内田　これは東方文化学院の（?）、これは（?）したのがありますから、これのうち何枚か（?）あれば、これはプラン、エレベーション、セクション、ディテール完備しております。これは日本人が外国に建てた永久的建築物ですから、いまはめずらしくない、いくらもできているかも知れないけれども、この時分、日にちはまたほかの書類でわかります。日付が入っていないので、いつ頃のもの

だか、門も似ていますね。

——これは東方ですか。

村松　全部そうじゃないんですか。

内田　東方文化ですね。図面がまざっているんですね。

——これも先生東方の（?）。

内田　これ東方学院ですね。

村松　当時の往復書簡ですね。昭和五年・・・。

内田　これは博物館。やる時の予備実験の意味で、軒が出ると明るさがどうなるかというようなことを調べる・・・。

村松　これはおもしろいですね。

——むしろできた完成の図面よりも、そういう（?）図面のほうが・・・。

内田　こういうものをあるということを・・・。

——ちゃんと先生みな整理して残してありますね。

村松　整理して残すということは難しいことですよね。

内田　非常に手間が掛かりますね。

村松　どれを捨てていいかという判断をするのに・・・。

内田　増える一方で、雑誌などは大変なものです。東方文化学院の・・・。

村松　面積明細書ですね。

内田　もう一つおもしろいのがあったんだが、その肝心のやつは誰かに貸して。これは夏の実習の時に、これをぼくは実測した。この実測図面が大学にあります。これを縦に写真を写して、実測の途中でぼくがその横に立っているところの写真があったんですが、それを太田（博太郎）君が、その時分の明治時代のそういうような写真というのはいまはめずらしい珍品になっているから、あったら貸してくれということになっているんだが、それが出てこない。この中に入っていたんだろうと思うんだが、これがもういまはすっかり修築したけれども海龍王寺の西金堂、三十九年の卒業の前年の夏休みです。これは伊東さんに連れられて一緒に行ったんですが、この中に特別に。これがあとで京都の総長になった浜田耕作さんです。それから、これはどうもぼくはイェール大学でもって東洋美術史の研究をしていて、で日本に実物を見る必要があるというんで見にきたんで、ぼくは朝河貫一というふうに、あれは京都大学の教授で、現在共産主義の役員か何かになっているあさかわかんいちという人がいるんですね。それは同姓同名なんだが、同姓同名とするとちょっと名前がまぎらわしいし、その人と間違うというと具合が悪いというんで、一緒に行った笠原君と、池田君にこの間会って聞いてみたんですが、そうすると二人とも確かにあさかわだと、そしてイェール大学からきているというんで、そして休むというと酒は飲まないでジンジャエールをよく飲んだ、そしてジンジャエール、ジンジャエールといってふざけたり何かという。でどうも間違いないように思うんだけれども、何か同姓同名の方があるというと断わるか何かしないというと。あなたはご存知ないですか。共産主義の京都の支部の何か・・・。

村松　あさかわかんいちですか。

内田　もう一人共産主義の偉い人であさかわ・・・。
村松　河上肇、（?）。それから何かんいちですか、いましたね。
内田　それがこの間新聞であさかわかんいちといったように、そうか、その偉いほうは河上か。
村松　浅川は浅いに三本川・・・。
内田　何も強いてどうということもないんだから、そういう疑問のあるものはやめたほうがいいかもしれない。
――めずらしい（?）ね。（?）としてますね。
内田　ぼくも東京で総長になったから、東京と京都の総長が（?）。それからこの人も有名な人なんだけれども、名前を忘れちゃった。この人はあだ名を付けたんで覚えているんだが、これはお寺に着くというといきなり一番先に飛込んで行って、そしてまだみんな案内もされないうちに、いろんなものを刷るんですよ、墨で。
村松　拓本を取るんですね。
内田　その墨をポケットに入れて行ったんですね。それが背中へ出て、どうしたんだか背中が真っ黒になっちゃって、それでこれは背向先生という。近ごろはそういうふうに一緒に長く旅行するなんてことはありませんからね、そんな思い出はない。それから、これは日本人はあまりゆかないんだとみえて、どうもいろいろこちらのほうを旅行した人に聞いてみても、この孔子の廟、ことに孔子の何代の子孫とかいうのが一緒に、この人が有吉（明）、上海の総領事で・・・。これで東方文化のほうはわかりますね、設計図・・・。
――これが平面図ですね。
内田　立面図、だからそれの必要なもの、これはぼくとしては一つは博物館を屋根のあるか、ないかにするということのために予備実験をやるということと、それからもう一つは、天理の非常に大きな、これは高等学校の時分、あの時分もあれ一つでなくて天理学園というものを作って、それでそれをどういう格好のものにするかという、まだ鉄筋コンクリートの家はなかったですからね。で鉄筋でどんな家を作るかということで、やっぱりぼくは（?）さん自身が見てこういうのがいいということにすれば、そういう範囲内でぼくはまたぼくの考えを入れてやるからといって、ずい分方々歩いて見て歩かれた。でこれを見てああいう気持のものがいいから、ああいうものにしようと思うがどうだろうというから、それはぼくがやったものだからそれがよければそれにしましょうという。でどの程度にといったら、なるべくあれに近いようなものにしたいというから、で結局少し変だというんだけれども、あれの大きいやつ、ただ地盤のデコボコがありますから、こっちのほうは地盤の平なところですから、だから一方は三階で一方は四階ですか、一方は二階、一方は三階でしたか。
――そうです。
内田　そういうふうに使われた思い出があります。それからそれと同じようなことが小平記念館。あれを作る時にどういうのがいいかといってずい分日立の（?）も研究して迷ったらしいんだが、結局やっぱり・・・。
村松　小平記念館の場合に・・・。

内田　小平記念館は少しこれとは意味が違うな。

村松　やはり何かその前に参考になるものがあったわけですか。

内田　植物園の本館がね。そしてああいうようなものをというんで、そういうふうにしたわけです。こんなふうな写真が、ぼくはどこにあるか覚えてなかったんですが、幸いに出てきて・・・。こういう大講堂の写真が、大講堂は方々に写真があるんで、どれを撮ろうかという。これはあそこの写した・・・。

――きれいですね。またこの間写されたんでしょうが。

内田　これはカラーでありませんからね。しかしこれなんぞはなかなかよく写ってますね。

村松　これの原図はあるんですか。

内田　あればこれは鳥畑君でしょうね。これが正門で、さっきいったのはこのところに立ってこう見るような。それとは別にこれもいいですね。図書館と、これはぼくはミュージアムにするはずだったのが、いまは経済学部ですか・・・。

――ええ、研究所か何か中に入ってました。

内田　こっちが二号館で、こっちが一号館で。これはいい写真です。いい写真というのは、元がいいからよく写ったんだろうけども、写し方もこれはうまいですね。それからこれが大講堂、正面をずい分大胆に大きく写して、これが表門、これが裏側。これもどうも安田の結城（豊太郎）さんから苦情をいわれたんですが、実はこれを作るというんで下にこういう余計なものをくっつけた。でくっつけなければ首が出ないんだが、それでもいいのかというと、そういわれると首は出なければ困るという話で、この下の二階を高くして、ちっとも増やしてくれなかったんだが、まあ火事で焼けたのの損害だけは出して、これがぼくはどっか新聞の写真か何かで見たことがあるんだが、これを真上から写して非常におもしろい写真があるんです。

――ございましたね、東京大学。

内田　そうでしたかね。

――何かで私も見て、おもしろい写真でしたね。

内田　それがね（テープ替え）中村さん。

――モダン的ですね。

内田　デザインもいいでしょう。中のこういうのは、ほぼデザインが決まっていて、それに針金を付けるというので岸田（日出刀）君が工夫したんだが、岸田君はこういうことは非常にうまい。これはあとでできてから音響的効果は割合いいし、針金がなくてもいいかも知れないという議論が出て、取り除こうかという意見もあったが、大したことないから駄目になるまで置いといたらというので置いてあるが、別段目には付かないでおかしくないでしょう。

――このシャンデリアもなかなかいいですね。

内田　これは多分建畠君だろうと思うのです。それを連絡付けたらいいですね。

村松　この静粛な雰囲気がなかなか・・・。その上で取っ組み合いがあって大変です。総長の告示のあった日は、石を投げるものがいた。中は赤旗が乱立していて。

内田　そういうのを放って置くってどういうことですかね。ぼくら先生で総長にああいうことが起こったら、すぐ引っつかまえます。いまの環境はそうだけれども、その場になればあるいはやるかどうか、そんな架空な議論はしょうがないじゃないかということを言ったのですがね。

——そういう質問がどこからかございましたか。私も一度お聞きしようかと思ったのです。

村松　今度再占拠には建築と都市工の学生が一杯入っているというわさが出たのです。

内田　従来のああいう運動の例を見ますと、建築学科の学生は割合多いのですね。工学部はおとなしいが、工学部の中で暴れるのは電気と建築です。いままで一層左翼の強いのは電気科です。その次が建築です。それが不思議ですっかり改宗しましてね。建築にいた（？）赤いのがいて、佐野（利器）先生がてこずってあれはどうにもしょうがない。別扱いとして放っておくよりしょうがないということだったが、それが世の中に出て、まったく変って実に立派な青年になった。もう一人はぼくと同姓で、これがいま言った人のようには改宗しませんで、共産党から市会議員に出たりしたが、いまではそういうことはありませんね。共産党の党員ではないようです。内田何とかいいましたね。いま言った二人は同期です。二人はどうにも手を負えんと佐野さんがサジを投げてね。

——京都大学でもずい分建築科で赤い人が出て・・・。

内田　いまは京都は西山（夘三）君か。

——ちょっと赤いということだったのですが。

内田　京都には共産党員になっている人がいるのでしょう。東京では党員になっていた人が何か退めたとか、一度入るとなかなか退められないものですが、ほんとうに退めたのかしら。

村松　退めたということになっております。その後の考え方もおよそ共産党と縁がないのです。元々入ったことが変なくらいで、一時の興奮ぐらいですね。

——これは大講堂の壁画ですかね。

村松　これは二階ですね。

——総長室は二階でございますか、一階ですか、先生が総長の時は。

内田　あの時は二階でその上に三階、四階というのがございましたね。

——照明もその当時としてはモダンですね。

内田　これは新海（竹太郎）君の、これは本来伊東先生一人のデザインということにしていてもいいが、もしくは共同の、計算はぼくがすべてやりましたが。

——断熱材とか、構造的なことは先生がおやりになったことになっています。

内田　六甲の配置図、位置割りが出てきたのです。どうもぼくは野田（俊彦）君の作品集の中にそれを入れたのですね。うまいものですね、こういうふうに持ってきて。非芸術論など・・・。

村松　済南の領事館ですね。

内田　これはぼくのじゃなかったかな。ぼくと野田君と一つずつ

村松　原型ですね。

内田　実際にやる前にそういうのを作ったのです。

——上から見たら何かグロテスクですね。

村松　やはり開いているのと、閉じているのと・・・。

内田　ここにこう入っているのが・・・。

——先生がこの前おっしゃっていましたポスターですね。

内田　ぼくと野田君と山県（二郎）君と三人でやったが、実は半分以上は山県君がやったので、あとの三分の一ぐらいをぼくと野田君がやった。野田君はあまり気乗りはせんで、絵はあまり関心がないと言っていましたが、「耐火構造、最近のひん発せる大火にかんがみよ。烈風、出火、地震に伴う火災。戦時爆弾投下の結果を思え。木造家屋は（？）のごとし。耐火構造の建築費は木造の五割増しにてたる。耐火建築は盗難を防ぎ、衛生に適し安全なり。何ゆえに焼けざる家を建てざるや。耐火構造、内務省、警視庁。」こんなことをやるのはほとんど例のないことではないか。この耐火構造の時にこれと佐野先生の講演の中で、佐野先生もこの片棒をかついで方々小学校を講演して歩いたのですが、それを一番やったのは野田君と伊部君でぼくもしばしばゆき、山県君は最後の締めくくりを俺がやるのだと言って毎回必ず出て行ったが、山県君がゆくものだから俺にきょうは代わらせろと松田源治という政友会の人が行って・・・。

——あの方がやっておられたのですか。

内田　ぼくにいうので、君はどうせ原稿を作るのだろうけれども、「普通の人の原稿を作るのはとても骨が折れて駄目だ。ぼくのやったのです。ここにペチカが二つあるのです。これをぼくがやったほうで、間違って野田君のほうに入ったのじゃないかと思うのです。六甲のこの場所をやったのだというのがわかりますね。

村松　道路計画の・・・。

内田　この道路はぼくが決めたが、非常に山崩れが多くて困るところです。この道がなるべく安くしようとするつもりです。こうなってこうなって、またこうなってこのようにして、一番てっぺんまで上がっているのです。だからどこか一つ崩れると、それより下の部分はまた崩れるのです。それがいけないから、そうでなくなるべくこうやる。これはむずかしかったらしい。野田君にもずい分苦労させたが、結局こういうふうに途中でまじわるようにやってもらったのですが、これが本道でしょう。この土地の上を上がる。ゆきと帰りと別にしたのかな。

村松　かなり大規模な計画ですね。

内田　住宅地計画としては相当です。昭和三年です。この時分にこういうことをやっているのは、ぼくだけかも知れない。これは非常にへんてこなものになってしまったが、実際の形を知るにはこういう打ち方をするのは必要です。あんなまずい打ち方は駄目じゃないかと言ったが、いやほんとうのものをやるには、そうしなければならないのだと言っていたが、そのあと堀さんにそういう話を聞いて、やはりそういう説があるのだなと思ったのです。この上にくっついているのは写真があるはずですが、こんなふうなものが、これは両側にですね。これは石膏です。

は二、三行書いてくれれば一時間でも、二時間でもそれを長くやるから、わけはないから書いてくれ。要点をどこにおいたらいいか。」そういうことを・・・。

――震災前ですね。

内田　その佐野先生の演説で言われたことが、どうしてああ的中したかと思ったが、「もし東京で大震災があったということになると、陸上の交通は全部止る。だから海上から食料でも、何でも運搬してくるよりほかはない。ただ一番東京に入る道でもってしっかりしている道は甲州街道だけだから地震があまり大きくなく、その起こる位置が内陸から少し離れているところであれば、甲州街道だけが助かるかも知れないが、そうすればあそこは荷物の殺到するところだから、あそこに相当準備しなければならないとか、そういうことをいくら普段訓練しても、ああいういざという時になると、みな恐しさに集中して、普段の訓練などはなかなか効くものではないから、地震があってもこわれない家、焼けない家を建てるにかぎる」と言ったのですが、それを耐火構造の宣伝の中に入れてゆくようにしたいというわけです。

――いま見ても時宜にピッタリのポスターですね。

内田　これは山県君がもう少し長く局長をやっていればよかったのだと思うのですが、きかない気なものだから床次（竹二郎）君におこられて、それでとうとう退めたのでないが知事にだだをこねて。ここにぼくはエレベーションの写真がいくらでもあったと思うのですが、ないのです。エレベーションは野田君がやったことはやったが、ぼくのやった分が相当あるものだから、それでやめたのかも知れないと思いますが、プランとエレベーションがなければ駄目だ。

――先生の書斎に・・・。

内田　ないのです。これに関することは、まだこれから出てくるかも知れない。

――古賀君がそういうものがあるように言っておりました。あとで問い合わせてみます。

内田　これが六甲の別荘地のエレベーションです。敷地の大きいやつと小さいやつがあるので、そこのデザインをしてもらったのです。これは多分野田君だろうと思うのですが。

――ちゃんと日付も入っておりますね。

内田　これはなくても図面には直接関係はないのだから。

村松　カラーなどで写すには緑と太陽との調和がいりますね。

――これは夕方ですね、影が出ている。

内田　こんなにならないように、いろいろ進言したが、退める前だったので採用されなかったのですね。

村松　ある意味では世界的な傾向ですからね。

内田　慶応は一番先にやって、一番先に収まっている。

――収まっているかと思ったらまたやり出した。

内田　騒ぎを起こすのが目的ですね。これを見てもずい分ありますね。

村松　名誉教授の推選はそれぐらい詳しく書かれるのですか。

内田　名誉教授は昔は簡単だったが、ぼくがいる時分から非常に

やかましくなりましてね。これは波があるのですね。緩んできた時があって、その時に丁度名誉教授の任にあった中田何とかいいましたが、この人はああいう名誉教授と席を同じにしないと言って辞退した。ああいう理由までいわなくてもよさそうだが、中田（薫）というのはそういう人で、つまりアルバイトをやるなどというのは徹底的に嫌いで、法学部でも一番外の仕事で忙しいのは穂積重遠君だ。それに対して中田君は外の仕事をやらないのです。国の委員会の委員でも断るのです。小野塚（喜平次）さんと一度話をしたが、小野塚さんのいうには、あまり潔癖すぎている。ぼくもまさにそのとおりで、相当やっているので、そのために本職の授業や学生の教育がおろそかになってはいけないけれども、そうでない以上は大学教授は国の金でもって勉強しているのは、社会、国家のためになるために勉強しているのだから、それをよく利用しようとする人があれば十分協力すべきじゃないかと思うと言ったら、それもそうだがそれが度を越すと困る。小野塚さんも、中田君のようなのは潔癖すぎると言っていましたね。

　それで学士院の会員を引受けて学士院の会員になって、第一部長を相当長くやっておりましたが、しかしこれも健康を害して十分日を決めて間違いなく出席することができなくなったから退めると言って、とうとう退めてしまった。中田薫さんというが、その中田さんの奥さんが吉田元首相の妹さんです。それでここに住んでいたのです。ここの敷地に中田さんの奥さんのお父さんがここの家に住んで、それでその家を売って小さく仕切って手放してしまったのですが、中田さんの家はこのすぐ下のところに相当の敷地を取って、大学を退めてしばらくそこに住んでおりました。吉田さんも吉田家の養子にくる前の、何か日新汽船の社長（?）近ごろは偉い人の名前を忘れて困るが。

村松　このお宅を建てられる前はここは・・・。

内田　ここから赤十字の入ってくるまでに吉田さんの家と、吉田さんの家がいま学校がありますが、学校の手前までだと思いますが、それから六甲のところが三菱、三井、住友の隠居所になっていたのです。それから黒田清輝さんの家が高木町まで入っているのです。これは広大な家です。そのもう一つ先が高木町で市役所がある。一番先に黒田邸が解放されて、そのあとの住友の別荘とこちら側のほうは吉田さんの元のお父さんの家だけであって、向こうの学校のところまでは解放されて、それからここには住んでおられなくて、ぼくが前に住んでいた新龍土町の近くのところに越しておられたが、ここは二軒しか家はなかったのです。仕切っただけで、三井かに頼んで仕切ったものだから、割合仕切り方などよくできている。そうひどい工事をしたようなところはなかった。昔は広かったものですね。

村松　このあたりもまたお屋敷町が・・・。

――立派な木がないようですね。

内田　ぼくのところのも枯れました。学校の付近にありましょう。

――大きな家を建てるところはほとんどありませんね。

内田　それはああいうのがあると邪魔で駄目ですから切っちゃ

う。こういう大きなのは自動車のガソリンでやられたのですね。

村松　その原稿などは関野先生の担当ですか。先生の業績を・・・。

――（?.）

村松　大変よくまとまっているのじゃないのですか。どなたかおまとめになったのですか。当時だからひだ先生ですか。

内田　ひだ君だな。これを見て、大体ぼくもこれでいいのだと思うのです。これに何か少し追加すればぼくの履歴や伝記になる。

村松　ここにお書きになったのは先生の字ですか。

内田　それはぼくの字です。

――（?.）その前に関野先生？

村松　むしろ年表みたいなものですね。

内田　これは参考になりますね。必要な場合には見えるようにしてあります。

村松　いままで出してご説明下さったのが約二十一です。ただ、さっきの野田さんの本などもありますが。カットとか、見出しの使い方とかいろいろできるわけですね。これは図書館で前景ですね。

――ちょっと変わった感じの写真ですね。これもむしろ模様のような感じですね。

村松　坂になっておりますが、裏の弥生町のほうですか。これは内側で民家ですね。これは月光だな。

内田　これはどっちが月光だかわかりますか。

――こっちが月光で、こっちが日光です。顔だけじゃわからないが、このひざでわかります。私は月光は持っておりますが、日光の写真は持っておりません。

村松　これが三月堂の・・・。

――新薬師寺の・・・。

内田　これは室生寺だね。これは・・・。

村松　一九二七年三月二十四日ということで、あとは書いていないですね。

内田　これはぼくが書いたものに違いない。

村松　これは計画案ですか。

内田　計画案ですね。

――ここにも大きなものがあります。変わったところの写真ですね。

村松　自然科学研究所の当初案ですかね、さっきのパーツは。

内田　こういうのは支那人の請負者が、日本人が森林地えいぞうしょ。

村松　しょうぞうというのは請負ですか。上海自然科学研究所鉄骨工期の（二）ですね。

内田　これですね。

――それのオリジナルか、何かの。

村松　これは似ていますね、アーチが出ているところは。

内田　これはこの鉄骨の梁がプレートガーダーを付けてこういうふうに・・・。

村松　いわゆる柱梁というやつですね。

内田　はっきりと出てくるのです。初めてやったのは海上です。海上にはそういう写真はなかったかな。玄関が違いますね。

村松　玄関と中央に塔が付いていますね。

内田　やはり塔があって、本郷に似せてほしいということです。

――パーツがちょっと書きずらいところで、線が出ています。線が出ていいですね。

内田　これを入れればいいでしょう。

村松　これがさっきの鉄骨工事の（一）というやつですね。

内田　柱が出ていないですね。

村松　もう下は鉄筋で包み始めていますね。

――鉄骨の何か工作をしているところですね。

内田　これは建て方を始める前のことらしいですね。一九二一年九月だから。これが鉄骨です。これがぼんやり写っているのが残念だが。これは島岡君から受け取ったとそこに書いているか、そうすると覚えがあるから。これがこういうふうに（テープ替え）だからレンガのブロックの内側に入れたもの、コンクリートブロックの中に入れたものこれだけあって、それからこれはユースにいろいろ分けた。

村松　被覆、厚さ、調合。

内田　それを五年ごと、あるいは先になると十年ごとにそれを調べてみると、そういうことを佐野先生が始めて、それをぼくが引継いで一度五年経った時にあけてみたのです。その報告を何かにしたのでしたが、それを見たのか、聞いたのか理学部の今村明恒さんが非常に感心をして、あんな遠大な計画は誰も立てるものじゃない。そういう計画が実績はむろんないのだからこういうのをやっているのだということを一つ報告をして、それは外国人に見せてやる必要があるから英文で報告を書いてくれ、ということで報告を書いたのですが、いや報告を書いたのはもう少し後になるのだな。一度やったのを見て報告を書くようにということを今村さんが言って、学士院の例会でそれを報告されたのです。そういう関係でぼくも佐野先生のやられた壊した状況をいろいろ調べてみますと、先生の非常に忙しい時分であったものだから、コンクリートの調合だの、まぜ方だのは先生ご自身でやらないで、実際にそういうものを手掛けている職人を使っていろいろやらされた。そのために仕事はぞんざいで雑です。実験などをやる人がやったのでないから。従って調合なども予定どおりに行っていないということもあって、これは根本的にある程度のやり直しをする必要があるのじゃないかと考えたので佐野先生にそういう話をしたら、それはぞんざいであったことは認めるが、コンクリートのやり方はあんなものだと思っていたが、しかし出てきた結果を見ると、こんなにデッキが錆びるようじゃあ困るのだから、もう少ししっかりしたものをやり直してくれということで、ぼくもその意見だったからそれでやって、大体内容は佐野先生のやられたのと似ているのですが、少し数を増やし、調合などやすべての施工の方法などを丁寧にやって、普通の仕事よりはよほど丁寧なものをどっさりやったのです。

　それをいまお話したようないろんな状況のところにおいて、どういうふうに変るのかということを調べるのです。その模型を作るまではぼくがやったが、それからあとはぼくも忙しくなったので、そ

れにあまりかかわっていることもできなくて、材料は浜田君が非常に熱心で、浜田君に頼んで、これは引継ぐということでなくて、ぼくも大学にいるのだから、共同の仕事にしようということで共同研究にしたわけです。それから十年か、何年か経って出したのがこの震災予防調査会の報告です。それでこれを出して、ぼくらいい仕事だからゆっくり長く掛かってやるのだと言っていたのですが、二、三日前に浜田君に会ったら、この間ここでお目に掛けた写真にキャルボットの写っているのがありましたが、あれは工業会議か、太平洋学術会議かどちらかよくわからないが、浜田君と武藤（清）さんが写っているから、どっちかに聞けばわかるだろうと思ってそれを聞いたのです。そうしたら万国工業会議です。その時に、あれは教室に尋ねてきたのです。だからこの写真にあるように大勢あそこに集まって、家も何もずい分だらしがなくて自在画の教室で木造の家があって、そこに住んで研究をしていた時代であったが、そのキャルボットがコンクリートの専門家で、それを見て非常に賞賛されたのです。そういうことをぼくはあまり知らなかったのですが、この間浜田君に会って聞いたのです。キャルボットが賞賛したというのは、相当コンクリートの研究としては重要なことになるということです。それがどういうふうに言われたのか、そこまで詳しく聞いてみる時間がなかったが、何か書く場合には浜田君にそれを聞いて下さい。

それから以後、あれは継続してやるには少し増やしたらどうかということを相談しまして、少し数を増やして年限も増やして、いまではずい分かずがあるだろうと思うのです。十年だか、十五年だかやったそののちの切開手術はまだやっていないと思いますが、そのうちに何かまた適当な日時がきたらやるということになりますが、もう今になってみると十五年から、二十年近くなるだろうから相当おもしろい実験になってきていると思うのです。

村松　そういうのはちょっとめずらしい実験ですね。

――四十何年も・・・。

村松　そういうものの要素がないといけないのかも知れないですね。

内田　本式のああいう複雑なのは、やってみたのでないとわからないのですね。

――（?）

内田　そうなるとだんだん貴重になってくるのです。こういうものを途中で関係して・・・。

――それがいまだに続いているということは、ちょっとめずらしいですね。

内田　大同の都市計画の図面は今日出しませんでしたか。

村松　まだ拝見しておりませんが、この間先生の書斎にあったという話ですね。

――高山（英華）先生も忙しくて・・・。

村松　都市計画で大変なんです。

内田　都市計画は誰がいま主としてやっておられるのですか。

村松　高山先生、丹下（健三）先生ですね。

内田　近ごろばかに本が頻繁に出ますから、どうして頻繁に出るのだと言ったら、やはりボーナスをあてにしている。彰国社の人が持って言っていました。これは展覧会か、何かをやったのです。将来の特色、これは安田君自身がこれを見て、安田君が私が書いたのだといっていますからそうだろうと思うのです。しかし、展覧会した連名の中に安田君の名前は入っていないのです。これは高山君にも言ってあるはずですが、これは何か雑誌に出したのではないか。

――雑誌にも発表されましたね。

内田　これは日立の勝田の工業都市の計画案です。

村松　当時は某工業都市になっているのですね。

内田　そうです。

村松　これがこの部分の詳細図ですね。

内田　これとそれは違う場所かな。

村松　そっちは大同計画図。

――これはこまかく住宅の配置までしておられますね。

内田　これはあまりぼくは関係がないので（内田）祥文が主としてやって、五人ほどで個人展覧会をやったのですが、祥文のことだったらこれを、これは相当大きなものですからね。これは麻布の六本木方面をやったのだと思います。同じ密度で高さをそのように変えたらどんなものができるか。いま盛んにやっているようなことをその当時やってみたわけです。

村松　これは東北地方農村集落計画ですね。

内田　これはこういう委員会をつくって大体の方針を決めてやったのですが、これは主として高山君です。高山君に聞くと、これもかなり祥文にやらしたのだと言っております。それは高山君に聞いて下さい。これは建築学会の集落計画委員会というので委員会報告として『建築雑誌』昭和十五年一月号の別刷です。こういうのが出てくるといいのです。これは満州かな。

村松　住宅地域の構成・・・。

――それは東北地方の現象ですね。先生は満州もおやりになったのですか。これは東北地方としております。

村松　昔中国では満州を東北地方などと言っておりましたからね。

内田　それはそうじゃない、日本のです。

村松　満州を東北と言い出したのは戦後ですね。共産党の政府ができてからですね。それが満州のですね。

内田　昭和七年七月七日第一回の委員会を開く。これはやはり委員会をつくってやったのですが、これは主として岸田君が働いたわけです。その次に加藤鉄矢というのが一等主計で、その当時陸軍経理学校の学生であったのですが、これに協力するように命令でも受けたのですか、飛行機などの世話を焼いてくれたり、どこの土地に計画をやったらいいか、その土地の選定などについて詳しかったのたですね。ぼくと岸田君と加藤君の三人で、これを捜したのですが、ここにようやくあって、もっと大きいのがあるがこれは岸田君が書いたのじゃないかと思います。これはいざという時になると、ここ

のところに入り込んで、ここでもって何日か支えられる。そういうことは多分書いてないと思った。いまは書いてあっても差支えないですね。これがいくつか隣同士で救い合って本部のほうに行って、救いの大部隊がくるまでこの中で籠城して待っておれるような施設を作るということ。そういうことをいまの加藤君がしきりにやってくれたのです。

村松　回りに堀ですか。ずっと堀があるのですね。ここが城のます型みたいになるのですね。一種の要塞都市ですね。

内田　始終、夜襲われるのでそういうことのないように岸田君が飛行機に乗って行って、何回か往復しました。そして現地を見て、現地を見ても何にもないところです。こういうことをやったということはおもしろい、何にもどこからも頼まれたわけでもないのです。

――これは何かで見ましたね。

村松　建築学会の昭和八年の大会号ですね。

内田　これは場合によったら（?）がいいか、結論がいいか何か触れて、あとはこの目録ぐらい入れて。満州のようなところは日本の内地とは違いますから、こういうのはおもしろいと思って興味を持ちました。

――これがその一つですね。

村松　これが農場ですね。

――スケールが違いますね。

内田　これはちょっとおもしろいですね。しかし、やはり元気があったものですね。こういうのを誰も頼まれないのに無報酬でやってみようという、やはり興味本位、おもしろいからやったのです。

村松　張り切っていたのですね、新天地開発ということで。

――自分たちの夢を実現するということで。

内田　こういうところの入口。

村松　さっきのます型の計画、こんなことまでしたのですね。昔だったら五稜郭の・・・。

内田　五稜郭より新しいだけに進歩しております。

――屋根がちゃんと防音装置で。

内田　八年の大会号です。この委員会を昭和七年の七月にやったのです。それから始まったのです。東北のことだったか、政友会の政務調査会から、何か変ったのをやっているが説明しないかと言われ、それで行って説明したことがあるのです。ずい分いろんなことを聞かれましたが、政友会との関係など書かないほうがいいですね。

村松　六甲のきれいな図面はないですね。さっきの野田さんのとこれは違います。これは山の上のほうですね。さっきのはもっとスケールが大きくて・・・。

内田　ここに六甲の経営地計画の説明書があります。大正十五年六月だ。

――ずい分古いですね。さっきのは昭和三年と書いていましたね。

内田　このほうが形がすっきりしているような気がしますね。

村松　このほうがスケールが大きくて・・・。確かここの部分のようですね。

――道路計画ははっきり敷地割りまでできております。家の形まで

入れておりますから、これがディテールですね。

内田　こういうのがありました、大同です。これは学生諸君にみな配ったのですがね。これが工業都市、ここらに山のほうの都市があって・・・。

村松　大規模なものですね。

内田　これが宮城で前の旧市街です。それをなるべく傷めないようにして、こういう現状に差支えないようなものでつないで、これを作ったのです。これにして、こっちは工業地は作らないで工業はここに集める。これも相当研究したものでして、石炭は安くてただみたいにできる。誰でもみんな大同の都市からここに朝石炭を取りにきて、それでもって部屋を暖めたり、飯を炊いたりする。それを日本に持ってきたらどうかといろいろ研究してみたのですが、結局日本に持ってくるより少し大げさにはなるけれども、この現地に大きな工場を石炭と石灰石でできるカーバイドを作って、カーバイドにして日本に持ってきたほうがよかろうというので工業都市をして、あれはその道の専門家にも多少相談はしたのです。

その山で掘出すのに、これは前にもお話したことがあるかも知れませんが、ここを大同の炭抗の長など決めて堀取りの事務をやろうというので、民衆は掘取りもできる。上から掘って行って露天掘もできるような鉱山があるので、そこに相当な人を派遣して研究していた。何という人だったか、そこの副長をしている人を大同に派遣して専門的に大同の炭抗の状態をいろいろな方面から調べさせた。それらの人と同じ時期に大同に行ったのです。その人の話をいろいろ聞きましたが、石炭が専門ですから石炭のことだけしか考えない。誰に会っても、一体この石炭の分量はどのぐらいだろうと聞かれる。それに対しては勘定しきれないほどあるという答をするほか仕方がないので、いく年掘ったら尽きるという勘定が立たん。それは大したもので工業上の計算なら無限にあると思って勘定して行って、それで何年か続く。何年かの間に新技術が出るだろうから、それによって計画を変えればいいということだったが、それから野天掘の一番いいのは北支の何とかというところで、そこに行ってやっているので、行った時には驚いて、日本のように横穴を掘って穴をだんだん広げてゆくというばかげたことでなくて、上から掘ってゆけばそれでいい。大同にきて驚いたのは、いままでやっていたところに帰るのがいやになったというのです。こんなところがすぐそばにあるのに、あんなところで苦労してやるのは仕甲斐がないじゃないか。つまりぼくらの見た実際の状況でゆくと、大同に住んでいる人は朝何か適当な入れ物を、ばけつみたいなのを背負ってゆく者もあり、かついでゆくのもある。それで大同に行って、石炭の層がまったく上に露出している。それを掘ってそして必要な分量だけを持ってくるのです。冬は一軒の家から一人きてそれを家に帰って燃やしている。夏はそんなによけいいらないから代わりばんこに出てきて、必要なだけ持って帰る。それはただです。家の中でたいているが、煙は絶無ではなく、あることはあるが大したことはないのです。ぼくらも実際驚くような、上のほうからだんだん掘ってゆけばいいということのほかに、そんなふうにいろいろな便宜がある。

ぼくは日本に持ってきたらという勘定を天津まで汽車で持ってきて、汽車に積んで持ってゆけば三分の一ぐらいは燃料に使ってしまう。だからつまらない。ぼくは半分燃やしても、向こうから積んだ石炭の半分が天津にくる。それならいいだろうという勘定をして、それでも、引合わないことはないのです。それを向こうに工場を作ってやるということが成り立てば大変なことです。そういうのが大同にあるだけでなくて、山西省には二つも、三つもあるらしいのです。だから中共の資源は大したものです。近ごろのようになったら掘らしてくれないだろうが。

村松　あれだけの人口と資源があると将来大したものですね。

――これは大阪の北港のですね。これは野球場二面。

内田　大正十年ですからね。

村松　こういう野球場の計画など初めてですね。

内田　この時分は甲子園もできてなかった。やはり風がこう受けるから駄目だという説が相当強かったですね。それなら甲子園もできない。

――甲子園も同じです。海から続きですからね。

村松　こちらが海になるのですか。

内田　そっちが海でこっちが工場地になるのです。こちらが住友金属です。

――現在も残っているそうです。

村松　ずい分大きな計画ですね。これは野球場ですね。

――敷地はちゃんとしておられるし、すごい敷地ですね。

内田　これは病院とか、商店街とかいろいろ作っている。このはずれのところに政府の補助をもらって作った。これは病院です。

――ここが学校で中央の役所のようなものですね。

内田　そういうのはよけい作らないけれども、土地だけはただで提供するという計画でやったのです。

村松　これは元来埋立地ですか。

内田　ここいらは海です。海の中にそういうのを・・・。

――先生はここに半年ぐらいおいでになったのですか。土曜日に立って、日曜日みて、月曜日の朝に帰ってくる。この間そういう話でしたが、そういう記録が全然出ていないのです。

内田　住友の会社でやったことならあるのでしょうが、そうじゃないので住友と何か三つの会社でもって新たな計画実施団体を作って、そこでやるようにしたのですから。しかし、小さくはできたのです。都市計画はそうしなければ駄目だと思うのです。人から仕事を与えられるまで待っていたのでは、いつまで経っても仕事がこないので自分でこしらえて、こうやればこういうお金の勘定になるのだが、これでやったらどうですかと持ってゆくことが必要です。

村松　最近そういうのを始めましたですね。かなり大きな請負会社は、結局いままでは注文がきてから仕事を始めようとしていたが、注文を作ろうということです。

内田　そういうのを建築事務所でやり始めたのは坂倉（準三）君です。あれはフランスに行ってコルビュジエのやり方を見て、コルビュジエがそうです。何かラフスケッチのものを作って展覧会に出

して、俺にやらせればこういうものをやるが、誰か資本家はつかないかということで、それでいくらかバックする者が出てきて、そうするとそれによって先に進んでゆく。アフリカなどでやっている都市計画はみなそういうふうにしてできたのです。それをぼくは坂倉君のところでやっているのを見て、学生諸君にも非常におもしろいと話したことがあるのです。そのためというわけでないが、一時坂倉君のところにゆく人が増えてね。それと学生の利害の観念が変ってきたので、昔のように勉強するつもりでやるという人はなくなってきました。だから現在ではいまのコルビュジエ式のやり方はできない。辰野先生がやはりそうだった。よくぼくらと話をしたが、俺のところにきて月給をもらおうとは何ごとだ、実習をさせて教えてやるのだから月謝を持ってこいというのですからね。

――いま丹下さんのところなど月謝は出さんが、無報酬で置いてくれという人が多いのですね。

村松　大同の都市計画案についてがあるわけです。

内田　いまの大阪北港のやつとこれがあります。計画の要点ですね。昭和十四年十一月と十二月の二ヵ月にわたってやったのです。

村松　ではどうもお疲れさまでした。（了）

○第十六回（内田先生訪問、十一月一日午前十一時。）

内田　まだこの中に入っていないものがあるわけですね。

村松　時間的に申しますと、先生が終戦直後に東大の接収を拒否されたというところまで伺っているわけです。それ以後のことでむしろ戦後のことになるかもしれませんが、それともう少しダブりまして私たちお伺いしておいたらと思いますのは第二工学部の設立ということです。第二工学部の設立は十六年でございますね。ちょうどことしで二十五年になりますか。

内田　あれはいつでしたか。

村松　十一月の十六日、土曜日ですが、それまでに第二工学部の歴史を関野（克）先生の委員長で、私幹事でまとめなければならないので、いま追い込み中ですが。

内田　この間案内状をいただいたのですが、ほぼできておるようですね。

村松　印刷に出しておりますから、むしろ先にお伺いすべきだったこともあったのじゃないかと思いますが、それは東京大学百年史のほうにつけ加えるなり、新しいこととして・・・。

内田　そのほうとダブっているのかな。ぼくはあの中にぜひあったほうがいいのじゃないかと思うことは、あれがきまります場合に、つまり第二工学部というものがどうして起きたかということ、それについての記述はありますか。

村松　ある程度一般的な、当時の高級技術者の養成の要望とか、それに本郷の工学部がだんだんに定員を増してきたけれども、そう

いうこそくな手段ではいけないのだということですね。

内田　その部分に一体一つの部屋でもって講義をしたり何かをするのに、どのくらいの人数が最大限あるだろうかということを研究するための委員会ができまして、これは丹羽重光君が工学部部長のときに工学部の中にできていろいろ研究したのです。それは法科のようなああいう寄席式のやり方はぐあいが悪いのじゃないかというような世論がありまして、そういう関係もあっていろいろ研究したのですが、工学部の中でも機械科というのは一つ特別人数が多いのでして、そういう関係かどうか知りませんが、ぼくらわきから見ているので内部のことをよく知らないのですが、ほかの科に比較してまとまりが悪いのじゃないかという意見も出たのです。実際にはどのくらいの人数にすべきかということをやってみたわけですが、そういうことをやっている間に三年生はどういうふうに教育するか、その当時は大学は三年ですから。世間ではあのときの議論を、現在の新聞などを見ていると繰り返しているような気がするのです。道徳教育を少し強化する必要があるということですね。それに対してぼくも強くその意見を持ったのですが、いわゆる道徳教育というのは小学校、せいぜい中学校の半分ぐらいのもので、それから先は昔から道徳教育というものをいってみても、その名は通じないのですね。だから少なくも高等学校で道徳教育というのをやるのは、ほとんど意味がないのじゃないか。

村松　むしろ専門の勉強をする過程の中で、そういうのを通じて道徳心は養われるということでございますか。

内田　そうなんです。それがどういうふうにゆくのがいいかというと、やはり先生と学生との接触を多くすることが大事なんじゃないか、その当時建築学科の教室では、三年になって卒業論文の題目、卒業計画などがきまりますと、それを持って教授室に分属するのです。そうするとお互いに先生がどういうことをやっているか、学生がどういうことをやっているかということは、よくわかるのです。別段どうせ、こうせと言わなくても、大学ともなれば反省はおのずから出てくるので、そういうことが一番いいのじゃないか。先生のほうにしてもあまり変なことをやれば学生の手前どうもぐあいが悪いし、むろん先生のほうが一番先に自省するわけですが、それがいいのじゃないか。そういうことをやっている教室がほかにあるかということをいろいろ調べたのですが、あまり目立ってはないようでして、ぼくはそんな話を委員会でですると、全面的に賛成するわけでないが、なるほどそれはいい点があるなあというわけです。それを講座の数でいうと、今とほぼ同じで全体が四十人で六講座だったと思います。そうすると一教室先生につくのに五、六人、講座には助教授もおるので、助教授につく人もあるし、いろいろあるわけですが、これがぐあいが悪いじゃないかという意見が出たのは、建築のほうでもやっていたのですが、生徒と同じ教室にいるものですから、先生のところにお客さんがくるとお茶をくんでくれるようなことなどもあるのです。それでどうも大学院の学生がお茶くみをしているというのはおかしいじゃないか、という説も出たのですが、ぼくらはむしろお茶くみといっても朝から晩まで給仕のように使うわ

けでないのだから、ちょっと人手の足りないときにそういうことをするのもかえっていいのじゃないか。先生の日常の生活を見て、みんな批評力があるのだから、いい点はまねるし、悪い点はやめればいいということ。それから一つの講座の担当の人数には五、六人から七人、それで結局五、六人ということから始まったので、四十人というのではちょっと多いが、まあ四十人。機械のほうは従来の歴史が深くもあるし（?）ものだから、そして世間の要求の数も多いものだから、これは一がいにどうせいというわけにはいかず、機械のほうの先生たちでもってしかるべき改善策を講じたということ。やはり従来どおりでは多過ぎるから少なくしようという意見が強く出て、結局せんじつめるところ五、六人。それから先生と学生が大体において同じ部屋で研究をする、今度それがかたまって、だんだん大きくなってゆくと学部長というものが何にも関係することができない。大学というところは自治でもって教室ごとに勝手なことをやってはいるが、そういうのは学部長が全体を統括する責任があるので、その統括力というのが今のような一講座五、六人というのをもとにして考えていくというと、あのときの数を増そうというのは四〇〇人か何かで、ちょっと多くて、それではとても本郷でそれだけ増やすというわけにはゆかず、どうしても単位をもう一つ増やさなければやりきれないのじゃないかということを議論した時代の工学部長が平賀（譲）さんであったような気がしますが、そうでないですか。平賀さんの時分から第二工学部の問題が始まって、そして丹羽さんの時分にだんだんかたまっていったということでしょうね。

村松　その間ずいぶん時間がかかって内閣のほうでもなかなか採用してくれない。最後は海軍のほうのバックアップが強かったという話をききますね。

内田　そういうことはぼくは知らないのです。

村松　ただ準備委員会というのができまして、先生は最初副委員長か何かをやっておられて、それで二月か三月たって委員長になられましたですね。

内田　たぶん学部長になったときでしょう。

村松　学部長が委員長になられたわけですね。そこら辺の議事録はある程度ありますが、私たちむしろ敷地の選定ですが、あれは当時の営繕課長が清水さん・・・。

内田　あれは選定して清水君はすっかりなってしまってからだ。それまではぼくが・・・。

村松　先生がかなりいろいろお考えになったと思いますが、その経緯を少しお聞かせ下さい。

内田　場所をいろいろと考える必要があったのですね。どこにしようかといろいろ言っているうちに豊田久二という人、いまでも盛んに活躍しておりますが・・・。

村松　どういう方面の人ですか。

内田　法科で東大の学生委員長を長くしていて、非常に世話やきで小柄な達者な男だが、しかし非常にしっかりしていて、豊田さんが運動家であるという関係で長与さんとかなり親しかった。それで

長与さんのところにこういう土地はどうですか、東京などは土地はないですから隣接付近にないかということで、豊田君は当時の千葉の市長、この人の名前はだれだったかな、その人をよく知っていてそれを持ち込んできた。つまり豊田君が長与総長のところに持ち込んだのが一番最初じゃないのですか。ぼくは豊田君を知ったのは、大講堂の起工式をやるときに豊田君が学生委員長をやっていて、大講堂だから学生にも貸さんか（?）つまりそれだけ重んじられていた男だ。全学の総代として学生委員長だから当然ですが。それで始めて多くの人が学内の人は千葉に行くのを反対でして、何とか本郷の近く、その当時の考えとしては本郷にごく近くなところ、たとえば浅野さんのところあたりというのが工学部の中では相当強かったが、だけどこれは、ほかの各学部はてめえは拡張をして場所が足りなくなって困っているが、他のほうだって同じことで、そう工学部だけというわけにはいかない。むしろ学内の反対意見が強かったのですね。それで千葉のほうにきた。それで校舎をつくる前に検見川、これは長与さんがつくったのですが、大学にわりあい胸の病気の人が多くて、それを十分休学して休ませて与後が大事だというわけで、あとを十分に養生させて、何か空気のいいところに適当な療養施設を大学として持つ必要があるというのでやった。検見川も豊田君の関係だったのだろうが、このほうはあまりぼくは詳しく知らないが、たぶんそうだと思います。そこに学生の療養施設のような意味で、相当な面積をもって療養所を建てるという意味で、長与総長がいってこられたわけです。そういう関係があったから、千葉市長なども、運動場や療養所だけじゃつまらないばかりでなくて、むしろ付近の人は喜ばない、だからほんとうの学部をもってきてくれるとありがたいというわけで、千葉市のほうでは熱心だったのです。

村松　現在でいえば誘致運動ですね。

内田　そうです。それで大体きまってきたのですが、それでぼくが学部長になったときに、何とかして近いところに場所はないか、必ずしも本郷でなくてもということで、場所をさがしてみようというので、地図によっていろいろ空地をさがしたのですね。そうしたら地図の上では空地になる場所が相当にあるものですから、このように空地があるから、ここらはどんな状態にあるかあたってみようじゃないかというので、ぼくと丹羽君と相談して、そのときは清水君が営繕課長で、ぼくが学部長のときはもう営繕課長をやめていたのですね、それで清水君が地図の上の土地と実際の土地を引き合わせてみるということをやったのです。その辺から清水君が担当したのです。

村松　かなり候補地はたくさんあったのですか。

内田　どっさりあったのです。少なくとも五つぐらいはあったのです。それは野放しのようなところですが、差しあたりこのうちでどういうところがいいだろうかというので、丹羽君と清水君とぼくの三人で選んだのです。それでこれはどこでもいいからきめて実物をぶつかってみようじゃないかといってぶつかってみたところが、それはみんな軍用地です。軍用地は海軍ではなくて陸軍のです。陸軍の研究施設なり学校施設などは町の中ではとてもだめだから、む

内田　あの敷地の選定については総長としては長与さん、平賀さん。学部長としては平賀さんと丹羽さんとぼくです。

村松　敷地がきまって校舎が建ちますと、当時の省線の駅をつくったり京成の駅を移動したり・・・。

内田　あれは大学が鉄道のほうにはたらきかけたのです。

村松　一回生などはかなり稲毛から線路沿いに歩いたという話がありますね。

内田　（？）

村松　東京駅に出てくるかどうかでもめたのですね。十六年の四月一日が開学です。二十六年の三月末で閉学、八回卒業生が出ているのですね。

内田　最初の卒業式の時分にはぼくが学部長だったか、総長だったかな。

村松　最初は総長じゃないのですかね。

内田　学部長で教授、助教授の間で輪講会というのがありますが、あの輪講会で講演をしたときのメモですが、これはちょっとおもしろいもので・・・。

村松　ドイツのフォルクスワーゲンの工場ですね。

内田　そうです。これはぼくがつくったやつです。

村松　それは伺いました。

内田　フォルクスワーゲンのはこういう形でないが趣旨がそうですね。それを図案化してこういうふうに流れてこうなるという・・・。

村松　ですから内田式の一種の理想都市ですね。

こうに持ってゆこうということでやっていたが、それで行ってみたが一言のもとではねつけられてしまった。第二に行ってもそうです。第一は陸軍の軍事学校の敷地に予定しているという小平です。その当時は家も何も建っていなかったが、二番目に行ってみるとこれも何かでだめになって、三番目に行ってもだめで、結局正式に行かないで様子を聞いてみると、どうもどこもみんなだめなようで、これじゃしかたがないから千葉ならば（？）ということできめたのですが、それより少し前だったかな、土地を長与総長とぼくと豊田君、それを千葉の市長が案内して、敷地を見に行ったことがある。そのときの写真があるのです。ご存じないですか。敷地の形などはわからない。その敷地を獲得するにもずいぶん骨が折れた。そういうときに豊田君というのは、師団長などに直接会いに行って談判するようなところがある。つまり昔の学生はよくそういうことをやったものです。そのときは学生ではなくて卒業して仕事をしていたのです。その小平あたりをさがしている時分に、ぼつぼつと東京の工業地がなくなって千葉の工業地ができるような気運が出てきたのです。だから強く反対していた人も、そう一がいに排斥することでもないのじゃないかという空気が出てきた。それであそこにきまった。だからあそこにきまるまでは何年かかかったのです。一番最初に始まったのが平賀さんのほうがあとでしたかね。

村松　その辺は調べてみればわかると思います。しかし平賀さんも丹羽さんもその話には関係されたことは事実ですね。その前後関係ですね。

内田　工業都市です。ぼくが十六年四月から十八年三月まで学部長です。総長は十八年三月から二十年十二月までです。

村松　総長の任期いっぱいということではなくて・・・。

内田　終戦に伴ってです。あれは八月が終戦でそれからすぐやめるつもりだったし、やめなければならない状況にあったのです。そのときから手続きをしたが、選挙や何かがあって暮までに延びた。それで建築学会の会長が十年三月から十二年二月まで、そして十四年三月から十六年二月までの二回やっております。

村松　第二工学部の人間の問題ですが、瀬藤（象二）先生が初代の工学部部長になられたですね。工学部を開講するかなり前から瀬藤先生が工学部長の候補というか、そこらあたりの人選問題をひとつ。

内田　あまりそういうことを公にさせるとよくないのですが、内容は当時平賀さんが総長でぼくが工学部長であったときに、平賀さんとぼくとで、だんだん第二工学部が進んでくるから学部長をどういう人にやってもらうかきめなければならないので、相談して平賀さんが発言されて、瀬藤君がいい、あの人は緻密な人で適任だからぜひそうきめるようにという話をして、そういうことを予定して設立委員になったのです。そっちのほうの幹事をやって、そしたら初代学部長になった。そういうことでとっさにすぐきまったのです。

村松　人望があったのですね。

内田　人望というよりは事務的で、ことこまかに落ちなくやる人です。だから衆目のみるところだったのです。建築のほうの人事はその当時教授はぼくに、志賀君も教授になった。しかし実質的にはぼく一人できめなければならない状態にあったのです。これは書いては困りますが、つまり講座は六講座だったと思いますが、建築構造第一、第二。建築計画第一、第二。建築史学。都市計画。この六講座だったと思います。建築計画の第三を設けたらどうかというつもりだったのですが、これは講座を兼ねて、できればもう一つふやして建築計画の第三を設けたらどうかというつもりだったのです。それから人は大学の先生というのは学問が専門でして、その専門のことについては世界的な第一人者であるということはもちろんのこと、大学教授の任務としては、それとほかに教育するというほうの側も必要なんで、これは世間でそっちのほうをやっている人はあまりよくいわれないのですが、学生の養成はぜひ必要で、その両方を組み合わせてうまくやれる人、そこでいまのような趣旨でもって二つの分類があるのです。第一のほうの研究は何をやってもいい、その方面については星野（昌一）君がやったのです。星野君はその当時大学院か、ぼくの助手だったか忘れましたが。それから学生の世話をして、よくまとまってりっぱな人格をつくるというのには小野薫先生。その二人がやる。だからぼくの考えは、これはぼくの先見の明がはなはだ悪かったのですが、星野君は学校などきてもこなくてもいい、勉強してりっぱな論文を書いておればいい、小野君はそんな論文はどうでもいい、学校に始終きて学生の世話をやいてくれればいい、そういうつもりでやるから。それがあべこべになって星野君はちっとも学校に出てこない。小野君は毎日学校に出てきているというおかしなことになってきた。

村松　しかし私たち第二の建築の卒業生というのは小野先生からの教育的な感化は大きいですね。それは学校を過信するとかしないとかということを抜きにして、やはり精神的な感化は大きかったと思います。その点では先生のめがね違いではなかったと思います。

内田　（?）渡辺君だったかな、渡辺君がいるのだから本来いうと渡辺君にゆくべきだったかもしれないのですが。それからもう一つ、第二工学部の組織の点で重要な点はだれかが妥協して（?）つまり第一工学部、本郷の工学部にもまさるとも劣らんような学部をつくって・・・。

村松　決して学生にコンプレックスを持たしてはいかんというそれは・・・(?)あいさつの中にありますね。

内田　（?）やはりそういう特別な理由がなければああいう人は選ばれもしなかったし、また選んでもこなかっただろうと思います。(?)などは先輩順に十名くらいきめまして、そのうちで一番先輩の人は本郷にいろ、次の人は千葉に行け、強制的にきめてしまった。そういうところがいくつかありますね。（?）

村松　あとは先生のほうでこういうことを話しておいたらよかろう、場合によったら断片的になってもよろしいのじゃないかと思います。

内田　工学部の中でも建築学科というのは一つだけ特別な内容を持っているということが、ときどき大学の内部でも外部でも議論にのぼったのですが、その始まり方にもよるのだろうが、工部大学校ができる、その工部大学校の前だかあとだか、これは関野さんのだれがどんな講義をしたかというものに詳しいと思います。美術学校が最初虎ノ門にできたのです。工部大学校が虎ノ門にできて、これはただの美術学校で東京美術学校といったかな、政府の学校です。工部大学が十年でその美術学校（工部美術学校）は十六年くらいだと思います。ちょっとあとだったと思います。前身の組織はあったかも知れないが。

内田　ともかく本郷に工部大学校がくるまえに美術学校があったのですね。美術学校の先生と虎ノ門の先生とは共通した点がかなりあったようです。とくに著しかったのは美術関係のことについて自在画の先生がいまして、その先生の関係の標本のようなものが非常にどっさりある。たぶんいまでも建築の教室に残っている石膏像などは、そのうちの一部分はその当時の美術学校の遺留品で、そのあとを建築学科が引き受けたのだろうと思います。あれは塚本（靖）先生が集められた分も相当あるのじゃないか。

村松　（?）の不忍池などは・・・。

内田　ああいうのは美術学校のものを引き継いだのじゃないかと思います。そういう成り立ちの関係もあるし、やはり最初は建築というものは芸術だという観念で出発した点があり、相当進んでいったところが工部大学校の中に入るようになったものだから、自然芸術的な要素が多少薄れかかったようなことにもなったけれども、しかし工部大学校の建築学科（造家学科）というのはコンドル先生がきて始めたものである関係もあるだろうと思いますが、非常に芸術的なものです。辰野（金吾）さんというのは、ぼくははじめ構造的

な先生かと思ったら、なかなかそうでなくて芸術的な方面にも力を入れておられたのです。辰野先生の入れられた先生は、塚本さん、伊東さん、関野（貞）さん。中村（達太郎）先生はどうかというのはぼくらよくわからないのですが、中村先生は関野先生と非常に近いですからね。

村松　極端に言えば同僚に近いですね。

内田　ほかの先生とは少し違うと思うのですが、それがみな芸術方面の人が多い。どうも工学部というものの中に美術で論ぜられるようなものがあるのはおかしいじゃないかという議論があった。これはもっともな議論で、ときどきそういう議論も出たのですが、塚本先生の担当（テープ替え）コンドルさんがつくったものであるかもわかりませんが、スペシャル・デザイニングというのは、住宅はこういうふうに作るのだ、クラブはこういうふうに作るものだ、ホテルはこういうふうに作るものだ、そういうことを教えるのが主になっております。塚本先生の講義はほとんどそういうことばかりであったのです。塚本先生は芸術家なものですから、建築の装飾論のようなことがスペシャル・デザイニングの中にある。

村松　辰野先生というのは、スケッチなどを拝見してもそういうデザイン、意匠のほうはあまりお得意じゃない。だから逆にそういう方面を充実しなければいけないというお気持になられたように私推測するのですが、違いますか。

内田　そういうことでしょうかね。ぼくも初めはそういうふうに思っていたのですが、どうも伊東さん、塚本さんのような方々の（？）などについてみると、ほとんどああいう（？）それからぼくは辰野先生が原寸図を書くのを偶然な機会によって何回か見せてもらいましたが、なかなかじょうずですよ。ぼくは卒業して三菱にすぐ入りましたが、ちょうどその時分に東京駅が工事中でして、おもしろいものだからときどきあそこに寄って見ていたのですが、そうすると先生が原寸を直していられるのです。それを拝見しまして、なるほどこういうふうに先生自身が木炭をとってやる必要があるのかと思ったが、それを実際に書いたのは松井（貴太郎）君あたりじゃないのですか。それはだれが書いたのかはわからないが、ちょうど帰りがけに見ました。手がすいたときに寄って直しておりました。だから初めにぼくは辰野先生は芸術的に通じなかったと考えていたのは間違いであったようで、しかし芸術方面を引き上げることに骨を折られたのはやはり先生自身だから、そういう考えかもしれません。

村松　岸田先生の書かれました『伊東忠太』という本の中に、伊東忠太先生の思い出話のようなもので、辰野先生があとになってしきりに工部大学校教授時代に構造、いわゆる工学的なのは計算すればできる、人のやったサンプルがある、意匠だけはどうしても頭からしぼり出さなければならないものだから、これは非常に大変なことだというので、しきりに学生にそういうことの訓戒をされておられたということがありました。

内田　そうすると先生自身は構造の方面に堪能であったわけですからね、そういう関係でどうも芸術方面、ことに伊東先生などは、建築学科というのを造家学科などという名前にしておくのはけしか

らん・・・。

――（？）経過があったのだろうと思うのです。

村松　明治三十年に造家学会が建築学会になっております。あくる三十一年に造家学科が建築学科になっております。それで建築が工学部の中で大変特殊な性格をもっておられる。それに対していろいろ学内で批判があったということですが。

内田　批判があったですね。われわれもそういうときに多少、ぼくらはもともと構造のほうですが、やはりどうもあれじゃぐあいが悪い。それと同時に建築のスペシャル・デザイニングといっても、建築のほうのスペシャル・デザイニングは学問的にいうと、ホテルがどうの、クラブがどうの、劇場がどうのということでなしに、音響とか空気とかそういうことでもって分けてゆくのが学問的で、そういうふうに分けてみると幾つぐらいになるかを勘定してみると、音響が一つ、空気の温湿度関係が一つ、照明、この三つが大きなものです。それをできれば建築計画第一、第二、第三にして、そのほかに都市計画と計画はスペシャル・デザイニングの中に入れていいが、ああいう一つの家を取り上げるものでなく集団的なものを取り扱うもので、だいぶ様子の違うところがあるから、都市計画と住宅問題、これはイギリスの分け方、あれはハウジング・アンド・タウンプランニング・アクトという法律になっている。そうすると構造が二つに歴史が一つぐらい、計画が一、二、三、都市計画と住宅問題という七つになるのですね。できればぼくは、一人でもってできるような時代が相当続いたものですから、建築学科をそういうふうにいくように直してゆきたいという感じをもっていた。それで塚本先生のあとを岸田さんが継ぐようになったものですから、岸田さんともそういうことの意見を交換して十分話し合って、岸田さんはデザイン方面の人で、あまり理論的な方面は不得意ではないがどっちかといえば芸術的な方面のほうを好むほうですから、大学の教授は教授になってしまえば何でも自分の好きなものをやればいい、そこに研究の自由があるのだから拘束されないで差しつかえないけれども、名前が、つまり建築計画の中の芸術的なものの部分を取り扱うということにして、そのあとは何をやっても、好きなことをやってもいい、そういうふうに心得ていてもらいたいということで、これは塚本先生にも立ち会ってもらったのですが、塚本先生はそういう話はよく了解してくれるのです。そのあと関野（貞）先生のために講座ができるようになった。関野先生は純然たる芸術方面ですからね。

村松　東洋建築史という講座ですね。

内田　あんなに長く助教授でいた人は少ないだろうと思うのですが、それは講座がないからで、それをいつのときか何か浜尾（新）先生が、ああいう人をそう長く助教授にしておくのは人を用いることを知らんものだから、何としてでも講座をつくるということがもとになって講座ができたのです。できて実際に関野さんが教授になったのは、何か教授になるとじき停年だったのです。それで後任者をきめるときに、やはりぼくが一人で建築を背負っている時分だったのです。ここで歴史の講座をへらそうといって、そうでないととても前に言ったような理想的なことにならんから、それでいろ

いろあったのだが、伊東先生がどういうふうに考えられていたがしらんが、その時分は名誉教授になっておられるか、ならんとしている時分であったから、あまり意見は述べられなかったように思います。それで歴史の講座のかわりに計画の講座をおくというわけにはいかないものだから、計画の講座を増やしたことにして、そのかわりに歴史の講座が二つあるのを、関野さんのためにできたのだから関野さんが停年でおやめになることだから同時にこれをやめて、そのかわりより必要な講座があるからそっちのほうにむける。だからごまかしてしたのではなくて、一つ廃してかわりに一つやるということでやって、このために教授になったのは平山(嵩)君です。

村松　しかし大学の講座を一つ増やし、減らすというのは大変なものですね。私、先生のお役目というのは第三期というか、後につながる建築学の一つの体制をおつくりになったと思うのですが、確かに大変なお仕事だったと思います・・・。

——ちょうど私たちの時代が関野先生の講義で（?）

村松　計画の講座が平山先生の担当としてできたのですが、都市計画などはどういう経緯ですか。

内田　都市計画はこれはどうしても作らなければならない、あれは本来いうと工学部に専属すべきものではないのです。それを建築が始めたものだから自然工学部のものだということになって、本来いえばあれは理科、地理、経学、これは経済学部、それが入ってこないとほんとうのまとまった都市計画にならないのです。そういう他の学部におよぶことまで言っていてはしようがないから、建築のほうに何としてでも都市計画という講座をつくる必要があるということをかねがね考えていたのですが、実際の方面からあれは大学で助教授になった順位は浜田（稔）さんのほうが武藤（清）さんより先だと思います。同級生だが助教授になったのはそうじゃないのですか。これははっきりしないが、武藤さんは佐野さんの講座が早くあいたものですから同じ専門だしすぐ教授になられた。浜田さんのほうはなかなかなくていつまでもいつまでも助教授でとまっていたのです。これを何とかしなければならない。そこで第二次大戦がだんだん始まりかかってきて都市の防火ということが必要になってきたのです。そういうところには少しごまかしがあるのではなはだ不都合だと言われるかもしれませんが、浜田先生は材料専門にやりたい、材料をやりたいために建築に入ってきたのだ、という根底が深い希望なんですよ。都市計画でもいやでないのでしょうが、あまりどっちかといえば進まないほうです。しかし防火のことには興味をもってやっている。だから都市防火ということで講座ができるかもしれない、そうしたらそれを引き受けてくれないかというと承諾する。浜田さんがなかなか執拗に材料を要求されていたのです。材料はちょっとできる見込みはないのです。いまはどうか知りませんが、ぼくらの時分には材料をつくるといえば土木の材料が必要だし、機械も必要だし、あっちもこっちもみんな必要になるものですから、そうすると結局普通で一つでいいじゃないかということになってしまう。だから最後にいろんなことがからみあって、浜田さんとすればいやでもないかもしれないがとにかく引き受けざるをえない状態

になって、都市防火とその講座をつくるについての説明書を文部省に出したり何かするのをぼくがつくったので、都市計画という文字はそこには書いてはなかったが、しかし都市防火という名前で、その当時とすれば都市計画といえば、ほとんど防火というものだから、それで入れることにして。第二工学部の講座の名称をきめたりなどする場合にはそういうことはちっともなくて、六講座何するということできめられたもので、本来いえば建築計画というのはもう一つあることが必要で、場合によればさらにもう一つふやすとすれば、いまの建築計画が三つありますが、そのうち音響にあなたのほうで堪能な人が出てきたようですね。

村松　石井聖光さん、私の一年先輩です。当時残っていたのは音響ですか。

内田　音響です。それで自然音響をやるようになったのですね。

――中村先生が材料の講座の先生です。構造の先生になった（?）

内田　構造というわけでないのです。建築の構造の先生です。あれはコンドルさんから始まったので、コンドルさんという人は万能でなんでもやったのです。だから、建築法規もコンドルさんが東京大学でつくった。建築全体の万能の先生です。

村松　建築の設備のほうなども書いておられますね。まだあの段階は建築学が無分化の段階で、分化をはっきり再編成されたのは内田先生の仕事だと私たちは見ているのです。

――（?）

内田　浜田さんはどうしても材料で、結局材料になったのです。あれは正式に争う場合になったら非常に不利ですね。

村松　三講座の増設が認められましたから材料というのが正式な講座になったはずです。先生ご自身はその時は何の講座の担当ですか、構造第一ですか。

内田　建築構造第一です。

村松　いわゆるビルコンですね。

内田　第二というのが鉄骨鉄筋コンクリート、佐野先生です。

村松　それに関連して溶接というのは講座にないわけですね。

内田　あればぼくが作ったというよりは、やられた当時はこうなんです。溶接というものが出てきていろいろのものを溶接でやることが必要であり、船に一番先発達したのです。船は平賀さんがそのほうの大家でいろいろやっておられたのですが、どうも少しゆきすぎがある。大学のようなところはよほどよく研究して、これを引戻さないまでも適当な向きにする必要があるということを平賀さんは感じて、自分が一生懸命船をやった。私のだから間違いないんだというのですが、当時日本の船は世界一発達したといわれていた。

村松　あのころ水雷艇が二つに艦首が折れたとか、ああいう事件があったのですね。

内田　土木の田中豊君が溶接に興味を持って、リベットなしの金溶接の橋を日暮里か、あの辺のところにデザインして作った。結局土木工作物に溶接は大いに用いられてくる。その方面の一権威者であるわけです。建築のほうでは内藤多仲君が溶接のことに興味を持っていろいろやったのです。ぼくは直接溶接をどうしようという

気持は全然なかったが、昔の関係で現場でもって鋲を打つのが困るので、何とかしてこれが溶接に代わるようになればいいと感じたが、内藤君は溶接のほうをいろいろ活発にやっておられ、そして主として田中豊君が先達となっていろいろ文部省などと交渉をして、学生の増員とからみ合って溶接の講座ができるということになったから、学生とからみ合っているから内藤君が大家でもそれでどうするというわけにもゆかず、本郷でやるとすれば誰がいいだろう。土木のほうではいないのだから建築のほうで誰かやる人はいないか。その時に仲（威雄）君は必ずしも溶接をやると決まっているわけでもないので、構造のほうの仕事をやっているから、しかし全然興味がないこともない。

村松　日立の助川工場なども先生がおやりになったのも、その頃ですか。

内田　ちょっと前ですね。だから建築のほうで溶接をやらして将来あるとすれば、仲君のような人だろうと話をしたら、田中君がせっかく講座ができるのだったら少しでもいい講座にしたいから建築に譲るから、その次は土木のほうに回してくれ。それで仲君が教授になった。これは田中君は実に気前のいい人だと思って、われわれはあまり骨を折らないのです。田中豊君の尽力によってできたのです。田中君は公平な人というか、気分のいい人というか、いまの溶接のような関係もあったからかもわからないが、内藤多仲君が学士院会員になる時は田中君が非常に骨を折ってくれた。

あの人は建築に興味があるのですね。ぼくは野田君など悪口を言ったが、ぼくは隅田川の清洲橋、永代橋、ずっと川上のほうまでいろいろ橋があるが、ぼくが一番いいと思うのは永代、その次に清洲、あれはみな田中君のデザインで建築家は誰も関係していないのです。ぼくは皮肉なことを言っては笠原君と笑ったのですが、やはり橋にも建築的な要素、デザインが必要だというので誰か建築家にやらしたらというので、建築の人を笠原君のところに入れて、橋の形について相談に乗るということをしたのです。その相談に乗ったか、乗らないか知らんがそこの手でできたのは、みんなよくないのです。田中君のが第一で、ぼくは田中君が生きているうちに「君のは非常にいいと思うが、どういうふうにして考えたのか」「考えは何にもない。ただソロバン玉をはじいて、そのソロバン玉の動いたとおりに使ったまでだ」と言っておりました。そうするとデザインの（？）あるいは構造そのままをやるのはかえって美しいものができるという理論がある。それの一つの証拠にもなる。

村松　いわゆる機能美といいますかね。橋梁といえば先生は橋の設計にはタッチされたことはないのですか。

内田　ないのです。

村松　京都では武田五一先生が、これはお弟子さんもやられたのでしょうが、大阪の梅田の橋は武田先生のもののようですね。

――四条の大橋（？）

内田　四条の大橋というのは武田さんもいくらか相談になったが、実際のデザインは柴田畦作さんです。柴田さんと武田さんは始

終組んでお互いに助け合ってやっている。あれは同級なのかも知れない。

村松　第二工学部を作る時の時間割で土木を見ましたら、橋梁美学という講義があって、講義の名前だけ載っていて、結局実施せずと書いてありますね。

――（?）

内田　コンモンレクチャーでやっていた。なぜ土木のほうは講座の数を土木は譲歩したのかな。

――岸田先生がちょっとおやりになった。

内田　岸田君がやったのです。土木に講座はあるのですか。

村松　いまはそういう講座はないのです。講義課目としてあったのです。

内田　講義課目としては建築の先生が行ってやったのです。

――岸田先生の随筆の中に（?）

内田　大学構内でなしに伝研（伝染病研究所、現医科学研究所）のこと、これはあそこの血清を取る馬の小屋、この間もちょっとお話しましたが、ぼくは大学を引受けることになって震災の前であったのじゃないのですか。長与さんが当時の伝研の所長で、長与さんとは前から面識があったものですから、伝研の作り直しをやるのだからうまい案を考えてくれと頼まれて。そしていろいろやってみてとにかく見ることが必要だというので一度見に行って、馬小屋の汚ない、ひどいのには驚いたのです。なお驚いたことには、その馬小屋が血清を取る馬であって、その血清によっていろいろなものをやるのでしょうが、その当時一番伝研の馬から取る血清はジフテリアの血清です。それでぼくは汚ないのに驚いて、一体人間の体の血の中に入れるのに、こんな汚ないところから出るのでいいのかと言ったら、それはいけないんだけれども馬小屋をいくら作ってくれといっても予算を出してくれないので仕方がないので、これは第一に作ろうというので、ぼくはそのことを申し立てて作ったのです。それはこの間写真を写しているが、非常に立派な馬小屋で世界一の馬小屋ができて喜ばれたのです。それが伝研の建築で印象にあるのです。それと同時に真ん中のところに血清を取る採血室があるが、採血室という名義で馬小屋が付属小屋だったのです。だから、採血室という名前に営繕課に書いてある。それから震災にあって、すっかり建て直さなければならないことになって本家を作るのですが、ああいう研究所を、これは前にお話したことがあるが、始終各部局が移ったりするものだから、あまり大きくない固まりにしておいて、その一固まりの処理によって他に類を及ぼさないで目的を達することができるようにするというので並べてやる式の研究所は、日立の中央研究所がそうです。

　それも、そういったものの家を建てるとなれば壮大に見えるものが欲しいらしいのです。みんな初めは部分的に細かいものをいくつも建てるということで、これがいいということで承諾していたがいよいよ建てる間際になって、上海のも日本が建てたのにこんなけちっぽいのを建てたといわれるのは困る。これは政治館であるわけです。日立のもそういうことに似ているが、汽車でずっと通ってき

た時に高いものにすると、遠くのほうから見える。人を案内する時に、あれがうちの研究所だというとよく話がわかるけれども、あまり小さいとそれはわからない、具合が悪い。それで大きくないといけない。私は三つやって三つとも小さな個々分立のほうから出発して、一固まりの大きいものになった。

村松　伝研はこの間久し振りに行って拝見したのですが、壮大なものですね。ことに高架が下から上がっております。壮大な高架ですね。

内田　当時の伝研の所長は宮川米次という人、それに付随して公衆衛生院があるのですが、衛生院はいま顧問をしている野辺地慶三、前の形などはあんなのを寄せ集めてみると、ぼくがやったのだということがすぐわかる。

村松　そういう宮川さんとか、野辺地さんの意向は先生の設計の中に入っているわけですか。使われている方の要求が入っているのですか。

内田　要求はずい分聞きました。特別な研究所はぼくはずい分やりましたから、むしろ向こうで言ったのをこういうふうにしたほうが便利だから、こういうふうにしたらどうですかといって直したほうが多い。野辺地君はロックフェラーとの交渉に当たった人で、非常に面倒な交渉を懇切ていねいにやって不都合のないようにした非常な功労者です。

村松　公衆衛生院とか、伝研というのはロックフェラーの資金ですか。

内田　伝研は国のものでまるで違います。公衆衛生院がそうで、衛生施設として寄付をしたわけです。だから所管が文部省でなくて、厚生省です。それを一固まりとして使えるように設計してほしいというのが宮川君などの注文で一固まりとして使うために（テープ替え）長与さんは正式の所長にはならなかったが、ああいう衛生学会の元老としてすべてのことに関係しておられましたね。都市計画の部分が抜けていますね。

村松　航空研究所の建物は一日掛けて、全部お話を伺うのによく見てゆかなければならないというので拝見したのです。航空研究所の建物もデザイン的におもしろいのがございますね。教養学部の食堂なども拝見して・・・。

内田　あれと小石川の分院、あの二つだけはぼくの設計ではないといったほうが正しいのじゃないかと思います。事務上のことはやったりしましたが、あれだけ大きな仕事をやるのにみんなぼくの思うとおりにやったのです。チョイチョイ出入りした人もいるが、相当長く固定していた人で清水幸重君、吉田貢君の二人で、ぼくの思うとおりに作らしていって何も自由にやれるものがなく相済まなかったが、清水君は元深川に航空研究所があった時にそこの技師でやって、そこから東大に変わってきた関係もあるし航空研究所は清水君、小石川分院は吉田、前は伊予田君といいました伊予田君に頼んだということでやりましたが、伊予田君は自分で設計のできる人だったから分院は伊予田君の設計で、航空研究所のほうは清水君はエンピツを取って設計する人でないものだから、事務的なことはす

べて清水君がやったが筆を取って書くということは岸田君に頼んでやった。あの独自の変わったものがあるが、全部といえるかわからないが大部分は岸田君の設計です。

村松　いまからみますと、なかなかいいものですよ。教養学部の食堂はアーチで組んでいるが、あれはどなたの発想ですか。先生のですか。寮の脇からすぐにめしを食いにゆかれるところ、元は農学部の化学分析場という名前になってました。

内田　これはぼくじゃありません。ぼくが退めてあとからです。ぼくがあそこでやったのは、本館といまは大分様子が変わっているが、本館をはさんで左右に図書館と会議室、講堂と図書館を作りましてそのデザインもできていたのですから、これは大きさが変わったとみえてこの間営繕課からもらった図面を見ると、ぼくの考えたこととまるで違うのですが、部分的に同じところがあるような話でした。真ん中に本館があって、本館のこっちが門で門をはさんで、この両端に相当間隔を置いてこっちが図書館です。

――（?）

内田　あれは浜田君のやった・・・。

――震災予防調査会の報告書のことで経政会と（?）

内田　経政会はお話することもなく、ただそういうものを同じ費用の中から作り出した。

――あとは都市計画関係で（?）

村松　こういうことをお話しておかなければならないという項目がございましたら・・・。

内田　大体お話してあるようですから、それでまとめていただいたほうがいいですね。同潤会で中心になって最後まで一生懸命やった。息子さんが建築家で建設省関係の仕事をしている。

村松　先生はいま公職というか、国会的な委員会とか、学会とかに関係しておられるのは、どういう分野がございますか。消防協会・・・。

内田　消防協会にはぼくは関係ないのですが、東京消防庁の中に火災予防調査委員会がありまして、その委員長をしていてそこでいろいろな研究をしているわけです。小委員会が三つか、四つぐらいに分かれていまして、それが各々やっているわけです。

村松　大きいので学士院の会員がございますね。

内田　学士院の会員、それに御所の建築、名前は偉いが最高顧問です。

村松　御所もうじき十四日にできますね。建築審議会というのは直接関係ないのですね。

内田　全然関係ありません。文化財も関係ありません。大学のほうで大学を卒業した以後の履歴書がほしいということがありますから、その時にどうせ調べるからそれをご覧に入れます。

村松　最近大学からそういうことを先生のところにお願いにきたのですか。

内田　大分前です。さっきのは最高顧問でない。三十五年十一月一日に宮殿造営に関する首席顧問です。

村松　平山先生とか、関野先生とか顧問がたくさんおられるから、

その中の首席ということですね。

内田　議長をするということでもない。議長は宮内庁次長がしますね。

村松　どうも有難うございました。（了）

（校訂　中野実・谷本宗生・藤井恵介・角田真弓）